大分大学大学院 経済学研究科 同窓会誌

四極青雲会

青雲

せいうん

第12号

目　次

経済という二文字 …… 徳高　康弘　2
大分のくらし …… 本谷　るり　〃
わたしの最近の関心事 …… 木村　雄一　3
熱血恩師と硬式テニス部 …… 大島　英明　〃
大分大学経済学部創立百周年記念式典を終えて …… 髙野　浩子　4
私の人生を決めた大学院の思い出 …… 泉　比呂志　〃
新たな道、新たな縁 …… 後藤　修一　5
地域包括ケアの推進によって地域社会に貢献する …… 鯰越　英夫　〃
士業への憂い …… 吉田　啓治　6
学びの重要性を認識した院生時代 …… 高橋　幹雄　7
大学院時代を振り返り …… 荒木　正宏　〃
しなやかに　美しく …… 吉岡　恭介　8
チャレンジ精神をモットーに …… 髙橋かおり　9
大分での16年間とこれから …… 姚　旭東　〃
1年間を振り返って …… 佐藤　凌賀　10
留学・研究初心者の私 …… 張　馳　〃
第12回四極青雲会総会 …… 事務局　11
第20回定例会・イノベーティブ経済セミナー …… 事務局　12
第21回定例会・イノベーティブ経済セミナー …… 事務局　13
2022年度新院生の紹介 …… 事務局　〃
編集雑感 …… 事務局　14

経済という二文字

日本銀行大分支店長
徳高　康弘

「経済」という言葉には、とても不議な響きを感じます。子供の頃からニュースなどで耳にする機会が多く、慣れ親しんだ表現である一方で、一文字目と二文字目に関係性が感じられない点で、熟語の中ではやや異色の存在。親しみやすさと取っ付きにくさが同居した、独特の趣を持つ言葉だと思います。

この神秘的な言葉のルーツは諸説あるようですが、大分が誇る偉人の福澤諭吉先生が、political economy の訳語として、中国の古典にある「経世済民」という表現から二文字を充てたのだ、と聞いたことがあります。世を経（おさ）め、民を済（すく）う。なるほど political economy の訳語として、非常にフィットしていると感じます。

ところが、時が経つにつれて、この経済という言葉が、political economy ではなく、economy の意味で使われ始めます。その結果、元々の政治に関するニュアンスは薄れていき、人々の生活に必要な財・サービスを生産・分配・消費する活動や、それらを通じて形成される社会関係のことを指すようになりました。並行して、経済現象を研究する学問である economics を「経済学」と呼ぶようになったのも、自然な成り行きと言えるでしょう。

経済学の分野では、私が大学に入って以降30年の間にも、例えばマクロ経済学においてミクロ的な基礎付けを重視するであるとか、心理学的な分析手法を取り入れた行動経済学のアプローチが注目されるなど、さまざまな展開がみられてきました。学際横断的な研究も盛んに行われるようになってきています。

ただ、そうは言っても、世の中はグローバル化が進み、複雑さを増すばかりですし、古今東西を問わず、人の心は移ろいやすいもの。そんなややこしい現代社会を分析する術が、そうたやすく手に入る訳がありません。昨年来の欧米諸国の物価動向を見ると、需要が高まったり供給制約が生じたりしたらやっぱり価格は上がるのだ、経済理論は正しい、と言いたくなるところですが、残念ながら、現実の世界は理論どおりに動いてくれるような生易しいものではなく、どちらかと言えば複雑怪奇なことの方が多いと感じます。人間は欲や見栄といったコントロールしづらいものを内面に抱えており、特にお金や異性関係が絡むと、常識では考えられないような行動に出てしまうことがあります。悲しい事件を耳にする機会も多いです。

いくらコンピュータの性能が向上し、より高度なモデルを組むことが可能になったとしても、仮定・割り切りの仕方によって分析結果は大きく異なり得ますし、そもそも人の行動なんて読み切れないのだから、論者によってマクロ経済政策の処方箋が異なるのも仕方がない、と言うと諦観に過ぎるでしょうか。

何となく分かったようでいて、実はさっぱり分からない。そんなつかみどころのない「経済」というものに思いを馳せるとき、福澤先生が遺したこの不思議な言葉は、「謙虚さを失わずに学問に励むべし」という、後世の者に対する警句なのかも、と思えてくるのでした。

大分のくらし

大分大学経済学部
教授　本谷　るり

大分に来てから驚くほどの年月が流れました。縁もゆかりもないこの地にこれほど長く生活することになるとは当初は考えてもいませんでした。大学院生の頃からどんどんと西の方へ移動したため、友人などからはそのうち九州からも出ていくのではないかとからかわれたりしていました。それがこの長きに至ったのはなぜかしらと振り返ってみると、居心地の良さ、それは住みやすさという環境面であると同時に人とのかかわりが大きいなと思っています。

大分に来てからの人間関係は私の大きな財産です。特にアウトドアにたけた友人たちができたことから、県内のみならず九州の各地へ出かけて楽しんでいます。キャンピングカーを借りて遠方へのドライブ、泊まり込んで釣り、私に合わせて低い山の登山、そして何より温泉三昧です。生まれた地にも温泉はありますが、これほど身近にあって毎日でも行こうかという贅沢さは世界に名だたる温泉地だからこそと思います。友人たちと風光明媚な土地を巡り、のんびりと温泉を楽しみ、各地ならではの産物を味わい、そうこうしているうちに大分弁も口から出るようになってきました。大分へ遊びに来る幼馴染には昔から住んでいるかのごとく各地を紹介し、「大分出身の人みたい」と驚かれもしました。

教員という仕事の面でもたくさんの方々との出会いがありました。仕事の面だけではない多くの刺激を受け、自分でも驚くほどの新しい関心を広げることができています。自分には縁がない・関係ないと思っていた分野に接する機会をいただいたり、それを広げたり深めたりするヒントを得られたりすることもあって、なんとおもしろいことかと感じます。

働くということや学問・大学のあり様を考えたり、同僚とのかかわりを深めたり、学生や大学院生のみなさんとの交流を続けるなかで、ようやく自分はまわりが少し見えるようになったかもしれないと思います。狭い世界の中で限られたことしか考えることしかできませんでしたが、わずかながらでも自分以外のモノやコトにようやく気がつくようになりました。しかしそれでも井の中の蛙であることに変わりはなく、何も知らないことに愕然としつつも知ることの楽しさに浸る毎日です。

なりふり構わずとにかく目の前のことを「やる」ことしかできなかった頃に比べ、ルーチンに追われて疲れてしまってもよい日だったと1日を終えられるようになったのは、大分のくらしを支えてくれる人たちあってこそ。これからも大分を満喫し続けたいと思います。

わたしの最近の関心事

大分大学経済学部
准教授　木村　雄一

大分大学経済学部で開発経済学を担当しております、木村です。大分大学で12年目になります。研究は東南アジアやアフリカの農村や小規模ビジネスを研究対象として、実証ミクロ経済学です。経済学全体として最近の注目点のひとつは、発展に対する政治体制や制度の影響という、従来の経済学から一歩踏み出した論題です。

西アフリカでは農地の所有権やアクセスが、親族集団による曖昧なものになっており、それが儲かるゴムの契約栽培に参入する誘因を削いでいるのか、というのが経済学の主な関心事です。

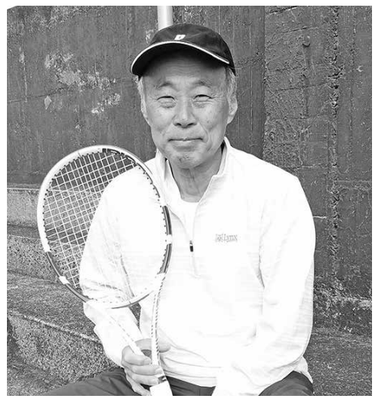
私はアフリカの農業について、ガーナの農村のゴム契約栽培について集めたデータを使った検証を行いました。ところが、なぜ親族所有地で投資が低調なのか、あらゆる仮説を検証した結果（投資をしても途中で土地を取られるかもしれない、努力して得た稼ぎを結局は分配させられる、自分の土地ではないので労働をサボる誘因になる、土地を担保にする権利がないので企業からの借入に支障が出る）、全て支持されないことが判明しました。結局、問題は投資誘因や効率性ではなく、生存や食糧安全保障が重要なアフリカ農村では、親族所有の土地は日々食べるプランディンやキャッサバなど食糧生産のために確保しておく、リスク回避が重要なのではないかと思われます。農村市場の発展は重要なのですが、考えてみれば、個人的な所有権制度と投資のリンクというような仮説自体が、どうにも西洋的な価値観から出てきた一種の思考のバイアスなのではないかという気もします。

同様の懸念は、世界の豊かな地域と貧しい地域の違いはどこから発生するか、という壮大なマクロ的問題意識についても当てはまります。Acemoglu ら（2012）の歴史制度分析の主要論旨は、世界の繁栄地域では強固な国家秩序が成立し、ブルジョワ革命が封建秩序を打倒し、市場経済・イノベーションを支える「包括的」経済制度への移行が進んだ、というものです。一方、現在の低所得地域がなぜ貧しいか？と考えるとき、近代になってからのオスマン帝国、インド、中国の帝国が崩壊したのは権力集中と、創造的破壊に抵抗する封建勢力の「収奪的」政治制度が災いした、といいます。ヨーロッパの発展については学術的に高度な業績が蓄積されている一方、停滞の理由について、一般向けで啓蒙的なこの本が掲げる世界観は、仮説や論理が先攻し過ぎて事実認識があまりに雑に過ぎる経済学の悪癖、加えてヨーロッパ中心の世界観がバイアスになっているように見えます。ピューリッツァー賞の Jared Diamond 1997 Guns, Germs, and Steel が標榜する「科学としての歴史学」は、発展の余地が大いに残されているという訳です。このギャップにどう切り込んでいけるか考えているところです。

熱血恩師と硬式テニス部

四極会事務局長
大24回生　大島　英明

私は、大分大学硬式テニス部卒業（大24回）と言っていい程テニス一色の学生生活でした。高校までサッカー中心だった私が硬式テニス部に入ったきっかけは「硬式テニス部は初心者の集まり。スタートラインは皆一緒」と言われた先輩の甘い一言でした。テニスの経験など全くなかった私は、他人よりも練習すれば試合に出してくれるかも…と思い、講義の合間をぬっては（時には講義をさぼって）コートに出ていました。当時部員が70～80名もいた為正規の練習時間では思うような練習ができなかったからです。



硬式テニス部で一番影響を受けたのは当時顧問をされていた御手洗丈夫先生（在学当時は教授。卒業後経済学部長になる）の存在です。先生はテニスと硬式テニス部をこよなく愛し、午後4時からの正規練習に参加しては部員の練習姿勢

に目を光らせ、少しでも手を抜くと「走らんか！」。練習試合で下級生が上級生にミスを誘うようなプレーで勝ちそうになると「そんな試合やめてしまえ！」と喝が飛びます。～強くなりたければごまかしのテニスをするな。どんな相手でも正攻法で立ち向かえ！～というのが先生の熱い信念でした。また、ある日先生の講義に出た時のことです。「お前何でここにおるんか。コートが空いとるぞ！」。私は先生の教えを忠実に守りました。

そんな先生は麻雀とお酒が大好きで、部員が自宅に押し掛けては高価なお酒を勝手に飲んで一緒に麻雀を楽しむ。「お前たちはメチャクチャやのう…」と嬉しそうに言うのが常でした。そんな先生を慕い5月の連休に行われるOB戦には日本全国から毎年100名近くのOB・OGが集まっていました。先生が亡くなった今もその伝統は引き継がれており、それが私のささやかな誇りになっています。

硬式テニス部も昨年創部100周年を迎えましたがコロナの影響でOB戦の記念大会はできませんでした。今年こそは無事開催できますようにと願いつつ先輩方や後輩達、そして何より同期に会えるのを楽しみにしています。

大分大学経済学部創立百周年記念式典を終えて

四極会大分支部長
大34回生　高野　浩子

5年前より取り組んできた大分大学経済学部創立100周年記念式典が昨年、無事終了しました。コロナ禍で想定外のスケジュールの中での開催でした。この5年間の石川前会長、野々下実行委員長を始めとする先輩方のご苦労を思い起こすと感慨ひとしおです。微力ながら実行委員会のメンバーとして参加させて頂いたことも大変勉強になりました。

ビッグネーム揃いの経済トップセミナーを皮切りに、黒土始記念講堂整備、記念碑・門柱レプリカの建立。自遊展での力作の数々。どれも素晴らしい取組でした。

1点だけ懇親会を断念せざるを得なかった事は、これを楽しみに全国からお越し頂いた先輩方に、申し訳ない気持ちで一杯でした。

さて、記念式典後の大分支部総会にて大分支部長に就任した私ですが、今更ながらの重責に身が引き締まる思いです。大分支部長になるという事は四極会の副会長になるという事。しかも、地元大分市。全国の支部の中でも会員数は多く、支部運営も活発です。

「大変な役を受けたね」と言われる事も多々あります。幸い支部運営には若い時から関わらせて頂きました。「四極会愛」だけは諸先輩に負けない自負もあります。

2018年には女性部「桃優会」も立ち上げ、皆さんの協力で初代会長も務めさせて頂いております。コロナ禍でリアル開催がままならなくはなっておりますが、年に2回の集まりで、女性に興味のありそうな講師をお招きし、その後、食事をして懇親を深めて来ました。時期は違っても同じキャンパスで学んだ方々との交流は、新しい発見と共に、常に楽しい時を過ごせています。

四極会の中で私に課せられた使命は、女性会員を含めた多くの若手会員に、いかに四極会に興味を持ってもらうか。同窓会活動がいかに有意義であるか知ってもらう事だと思っています。私自身会社経営をする上で諸先輩に助けられて来ました。その経験を後輩にも伝えて行きたいと思います。世の中もウィズコロナ時代に向かい、日常も少しずつ動き出しました。支部運営を活性化し、認知度を上げる努力をして行きたいと思います。

私が尊敬する田中康生大先輩がおっしゃっていた「楽しく無ければ、同窓会に人なんか集まらん」という言葉を胸に。楽しくて、また次も来たくなるような、そんな四極会にしていければと思っています。

青雲会にもちょいちょい顔出しておりますので見かけたら声をかけてやって下さい。

私の人生を決めた大学院の思い出

税理士
大学院6回生　泉　比呂志

私は昭和57年に大分大学経済学部を卒業し、そのまま同大学の大学院経済学研究科に進学しました。いまから40年前のことです。当時のことはほとんど覚えていないのですが、とにかく楽しかった印象が強く残っています。

私が大学院を目指したきっかけは税理士資格を取るための1つのステップでしたが、思えばこの2年間は、その後の人生を決定づけた貴重な時間でした。いま税理士として活躍できているのもこのときに得た「考える習慣」が大いに役立っています。

ご存じのとおり、税法は毎年改正があります。内容もさることながら施行される時期はその時々によって異なります。ですから税金を計算するときは、新しい税法が適用されるのか、1つ1つ確認する必要があります。また、誤りなく申告書を作り上げるのは当然のことですが、その目的や背景を考えることはそれ以上に重要で、その「考える習慣」の素地がこの時期に養われたのではないかと思っています。

さて、私の大学院時代のことを少しだけご紹介します。私は大学院の6回生です。一緒に試験を受けたのは何人かいたようなのですが、入学したのはなぜか私1人だけでした。非常に心細かったので

すが、1期上の衛本千代香先輩や張風波先輩（中国の留学生）からは大学院生活のことを丁寧に教えていただき、お陰様ですぐに馴染むことができました。

また、就職、進学した先輩達が時々院生室にお見えになり、その時は院生室の1室がコーヒータイムの喫茶室に変わりました。そしてテーマは、いま取り組んでいる研究課題であったり、新聞やテレビで話題となっている事柄であったりと様々ですが、その時の話題に皆で大いに盛り上がりました。そんなこんなでアットホームな大学院生活はいまでも忘れることのない楽しい思い出です。

新たな道、新たな縁

学校法人後藤学園
智泉福祉製菓専門学校長
大学院20回生　後藤　修一

人生の新たなスタートから早4年。此の間、新型コロナウイルス感染症の拡大、ウクライナ問題、急激な円安による物価の高騰など、取り巻く環境に大きな変化が見られました。

大きな節目を迎えるまで主に教育の道に励んでまいりましたが、現在は福祉・製菓の人材育成のご縁に恵まれ、日々学び・発見をして、歩みを続けているところです。

福祉・製菓は共にとても幅広く、奥深い分野であり、日本の社会、経済生活においても極めて大切な役割を担っているとつくづく感じています。それぞれに季節のうつろいや節目を意識した取組み、関わりを大切にされています。

最近になって日々の暮らし方や生き方と暦の関係性に関心をもち、季節ごとに自然を感じるなど、四季の豊かな日本で生活できていることに感謝しながら、様々な味わいも深めてみようという気持ちにもなっています。

この4年ほど、縁あって夢想神伝流「居合道」の稽古（週2回）にも励んでいます。熱心な先生方から丁寧なご指導をいただき、順調に昇段し、昨年は居合道四段を取得することができました。居合は戦国時代に生じた抜刀術で、実践的な剣技として長く受け継がれてきましたが、技術だけではなく、精神を鍛え、心を磨き、人格を高める「道」として発展し現在に至っています。

かつて日本は大和の国と呼ばれていました。つまり「大いなる和み」の国です。和みとは、許し合い、信じ合う心で、現代に生きる私たちにも脈々と受け継がれています。思いやりの心や感謝の心、豊かな感性等を「日本のしきたり」から呼び起こしてみると、例えば、神様・ご先祖様に感謝し、季節とともに生きるということにつながります。その際に不可欠だったのが「二十四節氣」と「陰陽五行思想」で、節目にはその背景や意味を考えてみることも大切と思っています。

居合道は一見単調な稽古のようですが、身体全体を使った動きであり、技の多様性から奥の深い古武道といわれています。多くの技の1つに「陰陽進退」があります。稽古や演武をするとき、ふと「二十四節氣」や「陰陽五行思想」を思い出します。

コロナ禍にあって、急激な環境の変化、閉塞感漂う時を過ごしてきましたが、ようやく出口が見えてきたようです。季節も春を迎えます。社会経済活動を含めてすべての好転を願いつつ、季節を感じ平穏な日常に感謝しながら何かに挑戦し、新たな道を丁寧に歩みたいと願っています。

地域包括ケアの推進によって地域社会に貢献する

社会医療法人関愛会　法人本部　顧問
大学院21回生　鯰越　英夫

高齢化社会では平均寿命は長くなり、健康寿命がおいつかない状況を生み出し、介護が社会問題化し、2000年に介護保険制度が施行されました。しかし、介護サービスは高齢者の生活を支える手段の一部に過ぎません。その為、日常生活や住まい、まちづくりをも視野に入れた地域包括ケアシステムの本格的検討の必要性が高まってきました。

2014年制定の医療介護総合確保推進法第2条に「地域包括ケアシステムと

は地域の実情に応じて、高齢者が可能な限り住み慣れた地域でその有する能力に応じ自立した日常生活を営む事ができるよう、医療、介護、介護予防、住まい及び自立した日常生活が包括的に確保される体制をいう」と定義づけられました。

その体制の構築にあたり大切な要素は在宅医療と生活期リハビリテーションであると考えられます。医療、介護、福祉は教育に於いては利用者に対しての接し方や専門用語、アセスメントの視点も同じではありません。その為、各専門職の連携や施設間の理解と連携教育が必要です。身体機能については要介護状態にならない為には専門職の指導は役立ちますが、それ以前に「生きる意欲」に関して本人の力と地域の力のミックスすなわち日常の暮らしを豊かにする工夫が欠かせず、地域を活性化させる取り組みが必要だと思います。

地域社会に於ける自身の役割がもたらす自己有用感、自己肯定感を地域活動の中で見いだす環境を作り出す事や一人暮らしになってからの生活の再構築、加齢や疾病、認知症の状態でも「住み慣れた地域となじみの人間関係」を続けられる支援が必要となります。このような住民同士のつながりをベースにまちづくりという創造的な取り組みを広げていく事が高齢者のみならず若者にも受け入れられるという内容が大学院の卒業論文でした。特に2025年、2040年に向けてあらゆる人々も地域で積極的に関わる事が重要になります。

また日常生活の中で支援を必要としている人々は幼児から高齢者まで、障害の有無に留まらず、参加しやすい共生社会への取り組みも高齢者だけのものでなく、地域包括ケアに含まれていくと考えています。

左が筆者

地域マネジメントの機能は住民主体の「実態把握、課題抽出、検討会議、計画策定、実践、評価」の繰り返しです。20年前の大学院の時はそれほど皆さん関心を示さなかったのですが、現実が目の前に迫ってくると無視できない問題となり、日本の取り組みがこれから高齢化していく国の注目が集める事になりました。

少子高齢化の進行が10年以上先行する地方の取り組みが広がり、持続可能な地域社会ができていく事が高齢化社会への対応だと考えます。残された人生、院生だった頃の初心に戻り、少しでも少子高齢化の進む地域に貢献できればと思う様になりました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

士業への憂い

税理士
大学院32回生　吉田　啓治

士業とは、国家試験に合格後、一定の実務経験等に基づき専門性の高い独占業務を与えられる職業である。

その種類としては、弁護士、公認会計士、税理士、司法書士、社会保険労務士、行政書士、中小企業診断士等がある。

私は、現在、縁あって税理士を生業としているが、数年前、今後無くなるであろう業種として、会計士、税理士等前記した殆どの業種が50位以内に挙げられているのを耳にしたことがある。

AIに取って代われるそうである。

そのことが、原因であろうかと思われるが、ここ数年、一部の国家試験の受験者数の減少が見られる。令和3年の資料では、平成24年と比較して、受験者の減少率が司法試験では59・2%、司法書士試験では53・6%、社会保険労務士試験では、28・2%、税理士試験においては、43・3%の減少率である。

令和4年の税理士試験の受験者数は2万9000人弱である。我々が受験した時代の半分程度である。なぜ、これほど減少したのであろうか。その理由として考えられるのは、人口の減少、前記した今後無くなるであろうとされる業種であること、IT関連の企業が多く発生してきたこと等を挙げることができるであろう。以前、建設業等で、危険、汚い、キツイ等のいわゆる3K職場には、求人を出してもなかなか人が集まらないという事例が多く見られた。現在でもあまり変化はないであろう。

これを税理士事務所に当てはめてみると、どのようになるであろうか。まず、他の事業所と比べて給与が少ないこと、厚生福利があまり充実していないこと、そして最大のKが国家試験が難しすぎることである。税理士を管轄する財務省に言わせると税理士試験は科目合格であるため働きながらでも合格できる。そして1度合格した科目は一生涯有効であると説明している。しかし、このことが税理士試験の受験者が伸びない大きな原因ではないかと思われる。国家試験の受験に関して、他の業種では一部特殊な方法は存在するが、原則として一発勝負である。

令和4年の5科目合格者は620人である。合格率は2％程度。あまりにも少なすぎる。公認会計士の受験者数が、税理士試験の受験者数とは対照的に右肩上がりなのは、会計士に合格すれば税理士の資格も授与されることが原因であると想像される。

このままでは、税理士の受験者数は（令和4年は微増したそうであるが）、ますます減少していくのではと危惧するものである。

税理士業界は、高齢者の比率が高すぎる。少し古い資料であるが平成26年に実施した調査によると約54％が60才以上である。その理由としては課税庁出身者が多いということ、税理士には定年がないことが挙げられるであろう。

現在の日本では、隣接する国々との間にきな臭い話も出てきている。防衛のための増税も必要となってくるであろう。

国家の基盤をなす税の専門家である税理士に対して、現状のような取り扱いでよいのであろうか。もっと若い人、女性を増やすことを考えてもらいたい。財務省に対して再考を促すものである。

学びの重要性を認識した院生時代

御菓子司　高橋水月堂　代表
大学院36回生　高橋　幹雄

四極青雲会関係者・先輩の皆様、何時も様々な場面で、御指導いただきありがとうございます。

四極会・四極青雲会の諸先輩・後輩に、多くの取り組みや会議でお会いしますが、その度に、「流石、分大経済学部の四極会、大分の政治経済に多くいるなー！」と、感謝感心しております。

小生が院に入学したのは、ある方にもう一度勉強してみないかと誘われ、一度お断りして二年後にまた同じ方からお声掛けしていただいたのがきっかけです。31歳で父が冥府に旅立ち、事業承継でバタバタと突っ走った十数年を過ごし、その頃は大分県商工会議所連合会の初代専務理事や全国商工会議所連合会の総務委員、その他地元でも様々な活動をしていた時期でした。しかし、本業の和菓子屋として、営業マン・技術者としての取り組みだけで良いのか、普通の食に関わる取り組みだけで良いのかと疑問に思う事もありました。そんな時に再度お声掛けして頂き、不思議とスーと心に響く物があり、もう一度学びを振り返る気持ちが起こり、入学致しました。

院生時代の初日、研究室に行った時のイメージは「暗い」。挨拶が無く暗い雰囲気で、コミュニュケーションを取ろうとしない方が多かった印象でした（笑）。とにかく幼少期から祖父の薫陶を受け、剣道・弓道・空手道と武道を嗜む者として、大人の流儀では最低限の礼節が無いのは社会人として如何なものかと思いました。そこで変革して行こうと、同期との懇親会を催し、先生方とも懇親会等を開き、明るい社会的な研究室に変わって行くよう模索しました。勿論、留学生ともコミュニケーションを取り、多くのお国自慢や事情を勉強させていただきました。その様な関係性が、その後の中国ビジネスに繋がり、多くの研究材料の要素にもなったと思います。

その後、中華人民共和国へ招聘され、毎月1回の一週間単位でのお菓子の技術指導と、ブランディング構築のお手伝いを四年半に渡り指導致しました。最初の指導地は、福建省福州市と武夷山。もう一つは、江蘇省塩城市建湖県でした。都心の上海や北京とは違い省のまた地方県の状況は過酷なものもありました。また、その頃修論を出す時期と重なり、小型PCを中国に持参し、書き上げようと試みましたが、仕事が終わると毎晩中国企業の接待や政府関係者との懇親会で、パイチュウを乾杯（カンペイ）！ベロベロな状態でホテルに帰っていました。お陰様で論文どころでは無くなり（言い訳になりますが）、一年長く更なる研究ができ、充実した院生活をおくる事ができました。

その間、中国出張では、様々な政府関係者と会い、中国ビジネスの表と裏を見る事もできました。この院時代に於いて、公私共に多くの事柄を経験する事ができ、研究考察と人との出会いの中で、この先の指標となる道が確立して行き、漠然とですが大まかな未来図が見えて来たのを覚えています。

この中国ビジネスの経験から、日本の暖簾（ブランド）が、いかに世界的に信頼されているのか、企業の安全安心の取り組みや、仕事に対しての心構えが違う事が、脈々と日本国の伝統文化のなかで継承されて、老舗の暖簾＝ブランドが、世界的に物作り大国日本として確立した由縁であると確信しました。

最後になりますが、院生活で学問のすすめから、学問の振り返りが出来ました。このような事により、大切な人との出会いも多くありました。今後ともOBとして、院生達を応援し、共に歩んでいきたいと思います。

最後に、このような投稿の機会を頂き感謝申し上げます。

大学院時代を振り返り

大分ヤナセAu販売株式会社
（Audi大分）　取締役
大学院42回生　荒木　正宏

この度は会報「青雲」寄稿依頼を頂きありがとうございます。この機会に大学院時代を振り返ってみました。拙い文章ではございますがどうぞご覧下さい。

私が大学院に入学したのは2018年

ですが、大学院時代について述べる前に少しお話ししたいことがあります。それは2014年、大分大学経済学部に学部生として入学したことです。当時年齢は41歳、多少なりとも驚かれた方がおられるかと思いますが、私自身現職（輸入車ディーラー）において管理職という立場、多岐にわたる経営者の方々と接する機会で己の無知に気付かされ、「もう1度経営に携わる基礎的能力を学びたい、自分の持つ資質を磨き能力を伸ばしたい、厳しい経済環境下においても通用する人財になりたい」という思いを強く抱き一念発起したという次第です。大学生活においては、二回り以上歳の離れた若い学生に交じり、遠慮しながらも座席は常に前席をキープ。経済学を基礎から学んでいくうちに、より専門的に具体的に学びたいと感じるまでに。丁度その頃、ゼミの担当教員でした鵜崎清貴教授より「大学院でもっと深く学んでみたらどうか。」とアドバイスを頂きました。そのようなありがたい後押しもあり、さらに高度な専門知識を習得したいと考え、大学院への進学を決意。大学院では租税法を専攻、演習では伊藤隆雄教授、湯淺豊生教授のもと租税法の基礎から重要判例について研究しました。そのなかで心に残る事柄が2点あります。1つ目は、演習では判例を題材として租税法の論点を協議するのですが、基礎知識に乏しく、なかなか積極的に意見が述べられず、自分の未熟さを痛感させられたことです。そして2つ目は、修士論文で自分の考えが上手くまとめられず、締め切りぎりぎりまでやり直したことです。しかしながら、同じ境遇の仲間の頑張りを肌で痛感することにより、あきらめずに何とか修士論文を書き上げ、無事に大学院を修了することができました。そして、それまで学んだことを活かしていこうと思った矢先に新型コロナウイルス流行。それは現職において甚大な影響を受けました。まずはどうお客様と接すれば良いのか、またどうしたらお客様に来店して頂けるのかということに苦悩致しました。更に半導体不足等の影響もあり、車両の供給不足と遅延、それが売り上げに多大に影響するようになりました。ただその時に感じたのは、こういう時こそ環境のせいにするのではなく、今まで学んだことに打開策のヒントがあるはずだと考え、今まで以上に真剣にビジネスに向き合うことにしました。

以上近況も踏まえて私の大学院生活の振り返りです。最後に今回の寄稿依頼、偶然にも私は50歳という人生の節目を迎えます。チャンスを掴み、大学院で学んだことの誇りを胸に、これからの人生実り多きものにしていきたいと思います。

しなやかに　美しく

平松学園
大分リハビリテーション専門学校
作業療法士科　専任教員
現役院生　吉岡　恭介

はじめに、このような寄稿のお誘いをいただきました四極青雲会会長の木本様に感謝申し上げます。僭越ながら、以下に小生の大学院への想いと今年の抱負について自由に書かせていただきます。

私は大分大学経済学研究科博士前期課程MBAコースに2022年の4月に入学しました。今、執筆させていただいている1月7日は、ちょうど1年前に右も左も分からないまま年末年始を返上して、願書と研究計画書を作成していた記憶が蘇ります。入試とこれからの未来に際して多少の不安もありましたが、これから起こる様々な出会いと学びに期待を膨らませていました。はや1年が経過し、言葉で表現することができないほどに、貴学へ入学して良かったと感じています。

普段働いている職場では、非常にやりがいのある刺激的な業務、教育を「教える、伝える、支える」立場にあります。その中で、無意識の中で専門職としての常識や組織の慣例に浸かってしまうことも、今振り返るとあったように感じます。大学で学ぶ中で「学生」という視点、「一般社会、企業」という視点を持つことで、多少ではありますが、職場や自身を俯瞰して見ることができるようになってきたと生意気にも考えています。また、大学での「出会い」も私の人生や価値観を大きく変化させています。担当教授の本谷るり先生をはじめ、多くの先生に専門的な内容を教わり、海外から来られている同期の院生の方とも熱いディスカッションを重ねたり、本同窓会の木本様、岩尾様にもお世話になったりと、ひとつひとつの経験がこの先の自分に繋がっていることを実感しています。まさに様々な出会いとコミュニティが広がった年でした。

私は毎年、年末に自分を振り返っての漢字を決め、年始には抱負を掲げることが慣例で、大切な「作業＊1」のひとつになっています。その中で、昨年末の漢字を「拡」としました。そして、表題に書かせていただいた「しなやかに　美しく」の言葉は恥ずかしながら2023年の抱負です。今年は仕事に、プライベートに、余裕がない中でも常に肩の力を入れすぎずに柔軟に物事を捉え、実行していくことが「しなやかさ」となり、ジェ

ンダーを越えた「美しさ」に繋がることを、今年40歳を迎えるにあたり目指したいと思います。

末筆ではございますが、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。本年もよろしくお願いいたします。

＊1　リハビリテーションに関わる職種の1つである作業療法では、「作業」とは、人が行う全ての活動としていますので、このような表現をさせていただきました。

チャレンジ精神をモットーに

大分大学大学院経済学研究科博士前期課程2年（2021年10月入学）
渡邊博子ゼミ
大分大学学生支援部教育支援課長
髙橋　かおり

この度は、寄稿の機会を頂き、大変有難く存じます。

私は、令和3年10月に大分大学大学院経済学研究科博士前期課程に社会人（シニア）入学致しました。大分大学教育支援課長として勤務もしております。令和3年4月に佐賀大学から転任してきた九州地区国立大学法人等の異動管理職です。実は、平成26年4月から4年間、大分大学国際交流課長としても勤務していたことがあり、単身赴任での大分生活も約6年となりました。大分は人生のターニングポイントとなった所。大好きな地、人柄、食べ物、温泉…私にとって第2の故郷です。

昭和57年4月、文部事務官として高卒で新設医科大学に就職しました。そして結婚～出産～育児をしながら仕事を続けつつも大学進学の夢がずっと心の中で燻ぶっていました。35歳だった平成10年10月、地元佐賀に放送大学学習センターが出来たことから一念発起して入学。仕事をしながらのレポート書きやスクーリングは大変でしたが、4年後、無事卒業。その放送大学での学びの礎と有難い周りのご縁により、今こうして「女性活躍推進・ダイバーシティ」を研究テーマに学ぶことが出来ています。還暦の今年、自分自身の職業人としての経験を振り返りつつ、大分大学で女性課長職は私1人という女性活躍とは程遠い現状を覆すべく、後輩女性職員にエールとなるような修論を書くことを目標に頑張っています。

生来、チャレンジすることが好きで、趣味の日本舞踊「藤間流」は約30年が経ちました。海外出張が多かった国際交流課長時代、大学間協定の式典等では和服で参加していました。日舞の経験が活かせたサプライズでした。現在は名取ですが、近々、師範の資格に挑戦します。これまで数々の舞台に立ち、祝舞や奉納舞踊などを披露して参りましたが、若い方々に日本の伝統文化を継承しなければいけない、和の精神や作法を絶やしてはいけないと最近強く感じております。定年退職後は指導者として社会貢献が出来るよう尽力したいと思っています。

もう1つ、チャレンジしたことに「特許取得」があります。夫が地元で3年程Ｃａｆｅを経営していた時期がありました。その時、食パンを半分にスライスする必要があり、家族でアイデアを形にして、「食パン用簡易スライス補助器」を作成。あまりにも便利だったので特許申請したところめでたく取得。インターネットの「特許情報プラットフォーム」サイトで「食パン　スライス　補助器」と検索していただくとご覧いただけます。将来は、地元木材を活用して商品化…という夢を持っています。

私をいろいろな事に駆り立てる魔法の言葉、それは「一生勉強・一生青春」。そして20数年前、亡くなる直前の祖母との会話です。「ばあちゃん、どがな人生やった？」「よう働いたばい。かおりさん、おなごは死ぬまで働かんばたい。頑張りんしゃい。」今、祖母の言葉を思い返し、働けること、勉強が出来ること、趣味が出来ることは、本当に幸せなことだと思っています。健康な体があってのこと、また家族の理解があってのことと有難く感謝しつつ、これからもチャレンジしていきたいと思っています。

大分での16年間とこれから

経済学研究科博士後期課程
地域経営専攻
現役院生　姚（よう）　旭東（きょくとう）

私は今、本学博士後期課程地域経営専攻（マネジメントコース）にて、渡邊博子先生のご指導のもと、「プラットフォーム・ビジネス」の発展過程や成功要因を地域の活性化に役立てられないかの研究を行っています。

振り返れば、別府大学で教員をしている父の誘いで、上海の中学校から学校法人別府大学明豊中学校に転入し、大分に移住したのが２００８年、今から16年前ことでした。35年前に先に移住した父の影響で、当時すでに日本語を話せていましたが、書くことがあまりできず、試験の時、設問は理解できるのに答えられないもどかしさを今でも覚えています。このため、成績は当然ながら振るわず、試験順位も下から2番目でした。その後は慣れたこともあり、毎学期のように順位が上がり、同じく学校法人別府大学明豊高等学校に進学し、日本のセンター入試を受けて本学経済学部に入学し、卒業後は約1年半にわたり別府市観光協会に勤めました。

観光協会での勤務は様々な学びと素晴らしき体験をもたらしてくれましたが、事業の硬直性や業務の連携など様々な地域観光組織の課題も知ることになりました。そこで、何か解決につながる道筋を

見つけられるのではないかと思い、本学大学院経済学研究科博士前期課程に進学、経営戦略を専門とする仲本大輔先生に師事し、今経営学で注目視されている「プラットフォーム」についての研究を行うことになりました。

「プラットフォーム」とは、簡単に言えば様々な関係者が協働しながらイノベーションを生みだす場のようなものです。皆様の身近にも存在しています。例えば、Amazon.com は Amazon.com というデジタルなインターネットサイトを取引の基盤に、様々な顧客（買い手）と様々な販売業者（売り手）を仲介する「プラットフォーム」です。Amazon.com がそうであるように、「プラットフォーム」はうまくいけば市場で支配的な立場を手に入れることができます。これを、WinnerTakeAll（ＷＴＡ／勝者総取り）といいます。

博士前期課程では、このような「プラットフォーム」の様々な特性を研究し、「プラットフォーム」の成功理由を探りました。博士後期課程では、この研究を基に地域貢献できるような題材を探していたところ、おりしも新型コロナウイルスにより、大分の観光産業が大きな被害を受けていたことから、観光産業の振興につながればと、観光産業におけるプラットフォームのＤＭＯ（DestinationManagement/MarketingOrganization、観光地域づくり法人）を研究しています。

本学では、地域経営に関して多くの先生方が専門科目を開講しています。このような恵まれた環境にこたえられるよう、また大分に貢献できるよう、今後も精進してまいります。

思えば16年間、大分の人々にはお世話になりっぱなしでした。この場をお借りして感謝のほどを伝えたいと思います。まずは父と、中学・高校での先生方、大分大学の教職員の皆様、諸先輩方や仲間たち、そしてすべての大分の皆様、ありがとうございました。博士の学位取得ができるように努力し、その後は、大学教員となって大分で活動（恩返し）したいと思います。今後ともご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

1年間を振り返って

大分大学経済学研究科1年
佐藤　凌賀

大分大学経済学研究科1年の佐藤凌賀です。私は昨年3月に大分大学経済学部経済学科を卒業後、そのまま4月に大学院に入学しました。コースは地域経営政策専攻で、所属するゼミは宮町ゼミです。

経済学研究科に合格したのは昨年2月の事で、4月まで自由な時間を過ごしていました。ただ、入学に近づくにつれ、徐々に「自分は大学院の授業についていけるのだろうか」と考えるようになっていきました。また、学部とは異なり少人数制でかつ同世代だけでなく社会人の方も多いことを知り、上手く馴染めるのかといったことも不安に感じていました。

しかし、入学後2週間程経過して、その不安は完全に払拭されました。大学院での授業やゼミは学部の知識を発展したものでしたが、ディスカッションを主とした形式のため、教授に質問がしやすく、分からない所があってもすぐに解決することが出来ました。また、ほとんどの授業が講義形式というよりは議論中心なため、メンバーの方々ともコミュニケーションを取ることが多く、すぐに打ち解けることができました。雰囲気も全体的に和気あいあいとしており、今まで議論が苦手だった私にとって本当に話しやすい場だったと思っています。

私は現在、地方都市の中心市街地に関して研究を進めています。入学してしばらくは自分が何をやりたいかがあまり定まっておらず、最終的にこのテーマに決めるまでには時間がかかりましたが、それ以降は毎日、文献や論文を調べ、データや資料の収集に励んでいます。当初、研究と聞いて地味で難しそうな印象を抱いていましたが、実際に進めていく中で新たな知識が身につき視野が広がっていくことを実感し、最近では段々と楽しさを覚えるようになってきました。

この1年間を振り返って、大学院での生活は非常に有意義な時間だったように思います。特に、国籍や職業、年齢が異なる社会人や留学生など、様々な人と深く関われた事は自分にとって貴重な体験でした。修了まであと1年ありますが、大学院生活の集大成として、良い論文が書けるようこれからも努力していきたいと思います。

留学・研究初心者の私

大分大学経済学研究科博士前期課程
現役院生　張（ちょう）　馳（ち）

２０２２年10月に大分大学の経済学研究科に入学しました。日本に来たばかりの頃の緊張と興奮は今でも鮮明です。その時、友達、チューター、先生のおかげで、最初、電車の乗り方もわからない「初心者」の私はすぐ日本の生活に慣れました。休日の時、大分の観光地に行ったり、温泉に入浴したりすることが私に日本ならではの文化体験をもたらしました。そしてクリスマスや新年の時、各国の人と一

緒にお祝いをしたりすることを通じて、異文化コミュニケーションを十分に楽しみました。親切な人と日本の美景はいつも私の心を温めてくれています。

生活面だけではなく、私は研究面でも初心者です。大学で日本語を専門として勉強しましたが、社会科学の課題にも興味があったので、社会学や経済学に触れたことがあります。今は中国の農村女性の労働問題に関心を持って、大学院では、その研究を展開しようとしています。「家事育児」を家庭内労働としてとらえるのは一般的ですが、3世代同居の農村では、家庭内労働は何でしょうか。また、企業の立地に恵まれない女性たちはどのような仕事をしているのでしょうか。そのような疑問を心にかけていたため、この問題を研究テーマにしました。実際にどの国でも農村と都市の問題は絡んでいると考えられます。だから、農村での女性の働き方を明らかにすることで、中国女性を取り巻く社会をより良く理解することができるだろうと思います。私は中国の「地方出身」です。そこで、自分の研究で私を育ててくれた女性たちの生活を多少改善できればと思います。

実は、「日本に留学に来た理由は何ですか」と聞かれると、「日本文化を体験したい」と答えます。日本文化・社会から知見をたくさん吸収できると考えるので、これからも日本文化を体験しつつ、院生としての問題意識を膨らませようと思います。初心を忘れず、今後2年間ももっと頑張ります！

第12回 四極青雲会総会

第12回四極青雲会総会を、令和4年5月14日17時より、大分センチュリーホテル2階「桜の間」で開催しました。コロナ禍の影響で第10回、第11回と中止になり、3年ぶりの開催となりました。ハイブリッドでの開催としましたが、当日リモートでの参加者が欠席でした。参加者数は総会・記念講演が17名、懇親会が14名となりました。

最初に記念講演では、院1回生で久留米大学商学部教授の高梠慎一（こうろぎ・しんいち）氏に講師をお願いして講演を行っていただきました。高梠氏には当初第11回総会での記念講演をお願いしていまして、1年越しの実現となりました。演題は「アメリカ管理会計史研究の方法と意義」と題して、長年アメリカの管理会計の生成・発展に関する研究をされてきた現在の到達点を披露していただきました。（後掲の「講演要旨」参照）

記念講演の後18時から総会を開催。最初に木本会長から挨拶があり、続いて令和3年度事業報告、令和4年度事業計画（案）、決算・予算（案）が提起・説明されました。最後には全員の拍手で議案が承認されました。

活動報告では、令和4年3月26日に開催した第20回定例会・イノベーティブ経済セミナーの報告がありました。これは、令和4年2月にロシアがウクライナ侵攻を開始した状況で、「なぜ侵攻は起きたのか」「ロシアの政治体制はどうなっているのか」を探るとして、急遽、大分大学名誉教授でロシアの外交・政治体制が専門の高山英男（こうやま・ひでお）氏に「プーチン体制とウクライナ侵攻」と題して講演をしていただいたものです。

令和4年度の事業計画（案）は次の通りです。1、会員間の親睦に関する事業として、（1）総会の開催（第12回総会の開催）、（2）イノベーティブセミナーの開催、（3）懇親会の開催、（4）その他（必要に応じた交流会等の開催）。2、会員名簿の作成並びに会報の発行、（1）会員名簿の作成（整備を図る）、（2）会報の発行（第12号を令和5年3月発行）。3、その他（セミナー等への参加の呼びかけ）

決算・予算（案）の説明では、第10回、第11回総会が開催されなかったことから、令和元年度決算・令和2年度予算（案）、令和2年度決算・令和3年度予算（案）、令和3年度決算・令和4年度予算（案）の説明がありました。

総会のあと18時30分から懇親会を開催しました。14名という参加でしたが、久しぶりの懇親会ということで、1人1人から近況報告をしていただくなど楽しいひとときを過ごして解散しました。総会参加の皆様、お疲れ様でした。ありがとうございました。

記念講演要旨

○会計とは、経済活動による収支を認識して記録し、利害関係者に対して報告をするまでの行為全般を指すが、会計は、財務会計（会社外部の利害関係者に財務状況を報告するための会計）と管理会計（経営者などが企業をマネジメントするための会計）から構成される。

○演者は、「管理会計の企業環境への適合性の喪失」という課題・問題について、アメリカで生成・発展した管理会計についての歴史研究を行うことで新たな検証結果や知見が獲得されれば、それまでとは全く異なった革新的な論理を構築できる可能性が出てくると考え、他の研究者の見解・理論（2次資料）だけでなく、経営者間の企業内部の報告書、書簡、議事録などの1次資料を利用して、自分独自の論理構築を目指して、アメリカの公文書保管所や図書館など訪問して資料収集した。

○演者の最初の問題意識の1つは、管理会計は、産業革命を経験し原価計算等の会計技法を生成・発展させたイギリスではなく、なぜアメリカで生成・発展したのか、ということ。

○なぜアメリカを研究するのか…アメリカは管理会計の最先端の実務・研究のレベルを持っており、日本の管理会計は原価企画等の一部を除き、そのほとんどがアメリカの管理会計を導入し研究が進められている。そのアメリカの管理会計を日本に適合するように修正・利用する必要があるので、アメリカの企業風土をしっかり認識した上で、アメリカの管理会計をその歴史的考察の中で、正確に把握する必要があると考えた。

○歴史的検証①、従来、19世紀の企業では経営管理のために投資利益率は使用されていなかったといわれているが、19世紀中期の鉄道会社では、割当予算作成時には鉄道運賃の設定および鉄道ルートの選定のために既に投資利益率が利用されていた。

○歴史的検証②、従来、管理会計が生成していく過程・実態について1次資料を用いてこれを解明しようとした研究はなかったが、アメリカ鉄道、デュポン火薬会社での管理会計の生成を確認（投資利益率に基づく経営管理の展開）。また、トップマネジメント→ミドルマネジメント→ローワーマネジメントと「上から下へ」生成したことを確認。

○歴史的検証③、経営管理組織の変化に適合した管理会計の技法・概念の発展についての1次資料を利用した研究がなかったが、デュポン火薬会社での職能部門別組織から事業部制組織になった際にも適応して発展したことを確認。また、事業部制組織構築以降は、主に戦略計画及びマネジメントコントロールの領域で発展し、オペレーショナル・コントロールの分野では発展しなかったことを確認。

○最後に、「管理会計は組織に従う」…組織に適合した効率的な管理会計システムを構築することが必要であることを確認。

○歴史研究は現在の問題解決や論理構築のために必要とされる基礎研究の1つであるといえる。正しい事実の認識が説得力ある論理の構築を保証するといえる。

（青雲会事務局）

第20回 四極青雲会定例会

―イノベーティブ経済セミナーとして大分大学大学院経済学研究科と共催―

・開催日時
令和4年3月26日（土）16時～17時
・場所
J：COMホルトホール大分　2階
サテライトキャンパスおおいた講義室
・演題
「プーチン体制とウクライナ侵攻」
・講師
大分大学名誉教授
高山英男（こうやまひでお）氏
・参加者

青雲会会員、現役院生、大学関係者等
会場・オンライン合わせて約50名

今回のイノベーティブ経済セミナーは、令和4年2月24日にロシアがウクライナに軍事進攻を開始したのを受けて、緊急に開催しました。色々な情報が飛びかう中でロシア側の視点は全くといってよいほど伝わってこない状況で、なぜ侵攻命令がでたのか、ロシアの政治体制はどうなっているのかといった基本事項を探ることは、偏った視点ではないバランスに配慮した見解を市民・県民と共有できるのではないかということで、ロシアの外交・政治体制が専門の高山先生にお願いして開催しました。

冒頭で、ウクライナ侵攻の理由及びプーチンの世界観について取り上げ、ロシアを大国として認知させるという考えが背景にあると指摘しました。続いて、ウクライナの歴史、軍事力をはじめとするウクライナとロシアのデータ比較を紹介した後、2021年7月に公開されたプーチン自身による論文内容の解説がありました。プーチン体制の枠組みと動揺、今後の展開についての展望、日本にできること等についてお話があり講演を終えました。

講演後には、会場・オンラインの両方から、ウクライナ国内のロシア系住民の反応やポーランドなど周辺国への侵攻の可能性などの質問が寄せられました。

今回のセミナーを開催するにあたり大学院委員長の宮町教授から相談があり、時間がない中で開催できたことに感謝を申し上げます。また多くの参加者があったことや報道機関の取材があり報道されたことからも、まさにタイムリーなテーマであったと思います。今後も大学と連携しながらこのようなタイムリーなテーマを取り上げていきたいと思います。

（事務局）

第21回 四極青雲会定例会

―イノベーティブ経済セミナーとして大分大学大学院経済学研究科と共催―

・開催日時
令和4年10月1日（土）
17時30分～18時30分
・場所
J：COMホルトホール大分　2階
サテライトキャンパスおおいた講義室
・演題
「景気動向指数と地域別景気動向指数」
・講師
大分大学大学院経済学研究科教授
下田憲雄　氏
・参加者
青雲会会員、現役院生、大学関係者等
34名

今回のイノベーティブ経済セミナーは、毎年夏に定例で開催しているものですが、10月の開催となりました。講師には退職予定（と聞いていた）下田先生にお願いすることにしました。先生が長年研究してきた「景気動向指数」をテーマに講演をいただきました。

講演では、国や地域の景気動向指数の状況が説明されました。景気とは企業や家計などの主要な経済主体の活動の状況や結果であり、各主体の活動は相互に影響を与え、タイムラグを伴って現象としてとらえられるもの。この観点から、大分県の景気動向指数についてストック・ワトソンモデルを適用して説明していただきました。

講演後には、複数の参加者から様々な質問が寄せられ、教授からの回答も含めて活発な議論が展開され、セミナーを終了しました。

久しぶりの対面のみでの開催となりましたが、34名の参加がありました。開催にあたってご尽力いただいた宮町先生他大学の関係者の皆様、ありがとうございました。

その後、会場をJR九州ブラッサム大分8階の「庭の食卓・四季」に変え、19時から有志で懇親会を開催しました。久しぶりの懇親会で色々な方に出席いただき交流ができたと思います。

ご参加の皆様、お疲れ様でした。感謝申し上げます。今後も大学と連携しながらイノベーティブ経済セミナーを開催していきたいと思います。

（事務局）

2022年度 新院生のご紹介

新院生の皆様、ご入学おめでとうございます。

四極青雲会（大分大学大学院経済学研究科同窓会）として歓迎いたします。

当同窓会は現役院生も入会資格がありますので、セミナーや総会といった集まりにご参加いただき、色々な人と幅広い交流をしていただくよう期待しております。

会則等は四極会HPの青雲会ページ（左記URL）をご覧ください。
https://www.shiwasukai.com/seiunkai/

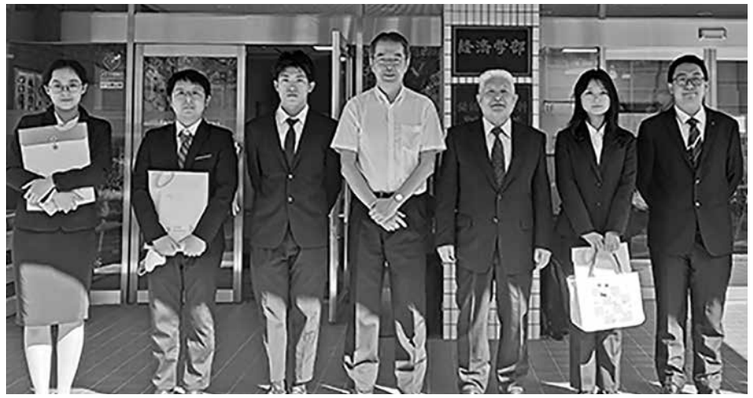
それでは、会員及び関係者の皆様、2022年度の新院生をご紹介します。

【2022年4月入学】

○博士前期課程（マスター）11名
（うち1名は非公表）
呉 瀚雄（オ ハヌン）（社会政策論／石井まことゼミ）、兼子 智之（租税法／米村忠司ゼミ）、新垣 薫（経営戦略論／仲本大輔ゼミ）、賈 依凡（カ イハン）（マーケティング論／松隈久昭ゼミ）、呉 顥涵（ゴ エイカン）（マーケティング論／松隈久昭ゼミ）、坂井 祐里（地域発展論／宮町良広ゼミ）、佐藤 凌賀（地域発展論／宮町良広ゼミ）、張 宏宇（チョウ コウウ）（経営組織論／本谷るりゼミ）、吉岡 恭介（経営組織論／本谷るりゼミ）、力丸 晃也（地域発展論／宮町良広ゼミ）

○博士後期課程（ドクター）3名
阿南 文明（経済政策論／高見博之ゼミ）、勝井 陽子（自治体経営論／高島拓哉ゼミ）、佐々木 美江（労使関係論／石井まことゼミ）

【2022年10月入学】



○博士前期課程（マスター）5名
（うち1名は非公表）
張 馳（チョウ チ）（社会政策論／石井まことゼミ）、兪 秦川（ユ シンセン）（国際経済学／柴田茂紀ゼミ）、張 凱勛（チョウガクイン）（比較経営史／渡邊博子ゼミ）、張 笙艶（チョウ シュウエン）（企業論／河野憲嗣ゼミ）

編集雑感

会報「青雲」第12号を発行することができました。

今回から小生（木本）が編集を担当することになりました。岩尾明氏（院32回生）や堀誠氏（院33回生）並びに三恵印刷の髙井道晴社長（大21回生）から助言をいただきながら、なんとか出来上がりました。

最初に取組んだのは、どなたにご寄稿いただくかということです。外部の方、大学関係者、現役院生、会員と分けて色々と検討しまして、25名ほどに絞って寄稿依頼をしたところです。今回ご寄稿いただいた皆様には感謝しかありません。ありがとうございました。

第12号の作成にあたって改めて第1号から第11号までを見ましたが、いやいやよくここまでやってきているな、すごいなと感じました。改めて「青雲」の発行を続けていかなければと思ったところです。

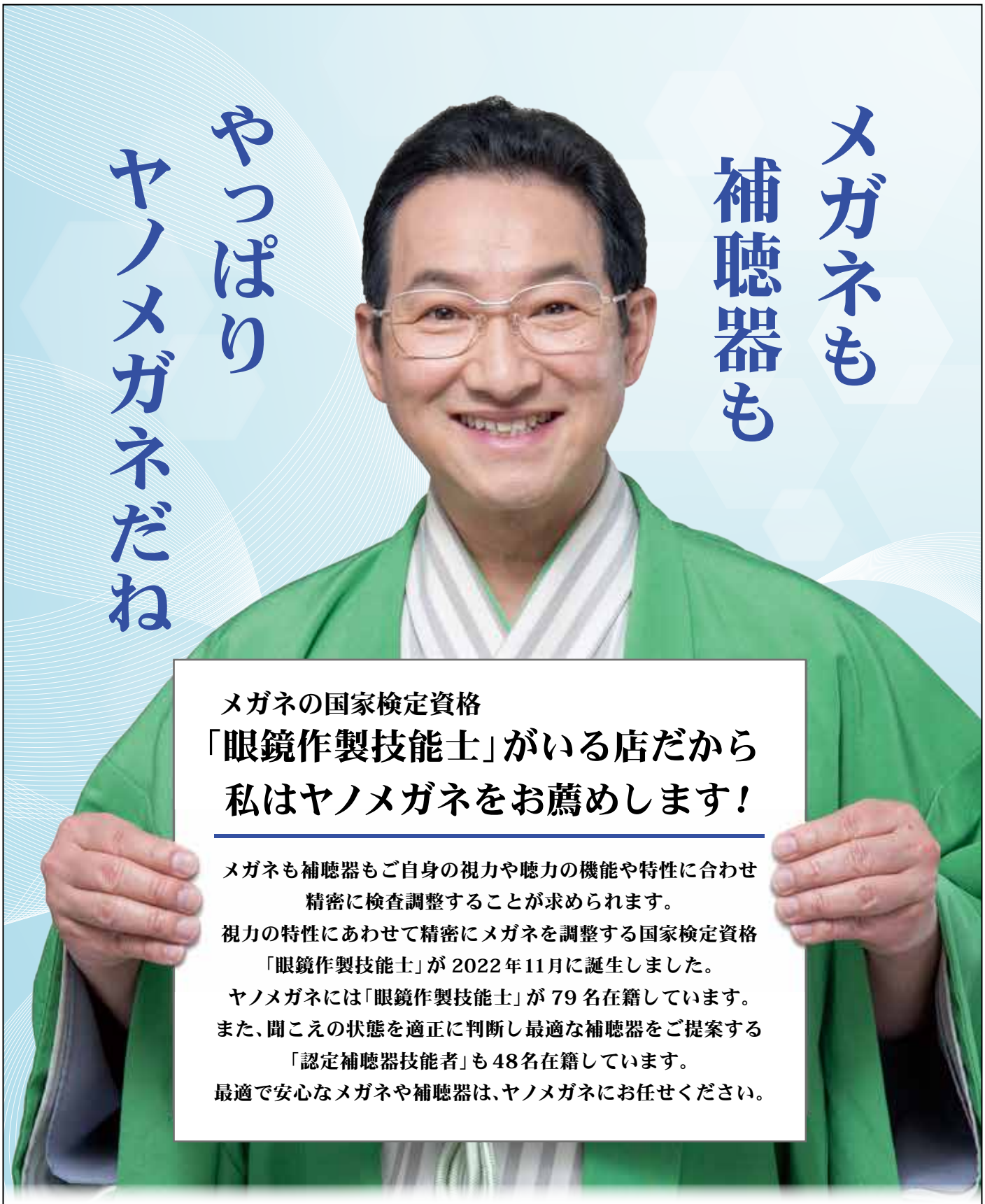
ところで、コロナの収束はまだ見込めませんが、withコロナの対応が世の中に少しずつ出てきているとこです。5月の連休明けには、感染法上の分類をインフルエンザと同じ5類に引き下げになります。この会報が皆さんの手に届く頃にはマスク着用も個人判断でとなっていることでしょう。3年前の状況から見るとやっと元の状態に戻ってきたかなという感じがあります。

でもすべてが元の状態に戻るわけではないですね。コロナによってもたらされた変化は何か。小生の仕事の関係から言えば、オンラインでのやりとりです。対面での企業説明会や面談がオンライン説明会やオンライン面談となったことです。これをやってみるとなんで今までやらなかったのかと思うほどです。オンラインは便利ですが、最終的には直に会って話すということも、なお求められているなと感じることもあります。この辺りは今後の世の中の動きで色々と変わっていくものと思われます。

青雲会の事業についても昨年からぼちぼちと対面での開催をしてきております。なによりも懇親会はオンラインでは楽しめないですよね。第13回総会は5月13日に開催予定ですが、以前のように皆さん集まってわいわいがやがやと懇親を深めたいと思っております。

最後になりますが、会報「青雲」の継続発行には会員の皆様からのご寄稿なくしてなしえませんので、今後とも皆様のご協力をお願い申し上げる次第です。今回ご寄稿いただけなかった会員の方には次回は必ずご寄稿いただくようお願い申し上げます。

（事務局　院1回生　木本英光）



メガネ・補聴器の専門店

ヤノメガネ

www.yanomegane.jp